

笠原南遺跡発掘調査現地説明会資料

令和8年(2026年)10月3日(土) 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

笠原南遺跡と調査の概要

■遺跡の概要と既往の調査

笠原南遺跡は、野洲川下流左岸の滋賀県守山市笠原町に所在し、弥生時代から平安時代にかけての集落跡および生産遺跡(水田耕作地帯)として知られています。

本遺跡は、昭和59年度(1984年度)に県道48号(主要地方道路近江八幡守山線)敷設に先立ち試掘調査が実施され、埋蔵文化財包蔵地(遺跡)が確認されました。その後の発掘調査で、奈良時代から平安時代にかけての溝で区画された屋敷跡が、また北側の笠原集落に近い地点で弥生時代末から古墳時代初頭(約1,800～1,700年前)にかけての集落がみつかりました。

公益財団法人滋賀県文化財保護協会は、令和6年度(2024年度)から、守山市土地開発公社からの依頼により、産業用地開発に伴う発掘調査を実施しています。令和7年度には、県道48号の東隣で弥生時代末から古墳時代初頭にかけての周溝墓群(前方後方形周溝墓など)がみつかりました。さらに、周溝墓群に隣接して、同時期の井戸や屋内棟持柱付建物が見つかり、墓域とそれにとまう祭祀空間が広がっていたことを確認できました。

■今回の調査成果の概要

今年度は、県道48号西側部分の調査を進めています。その結果、弥生時代後期から古墳時代前期(約1,900～1,700年前)にかけてを中心とする周溝墓や独立棟持柱付建物等が見つかり、別の墓域と祭祀空間が展開することが明らかになりました。

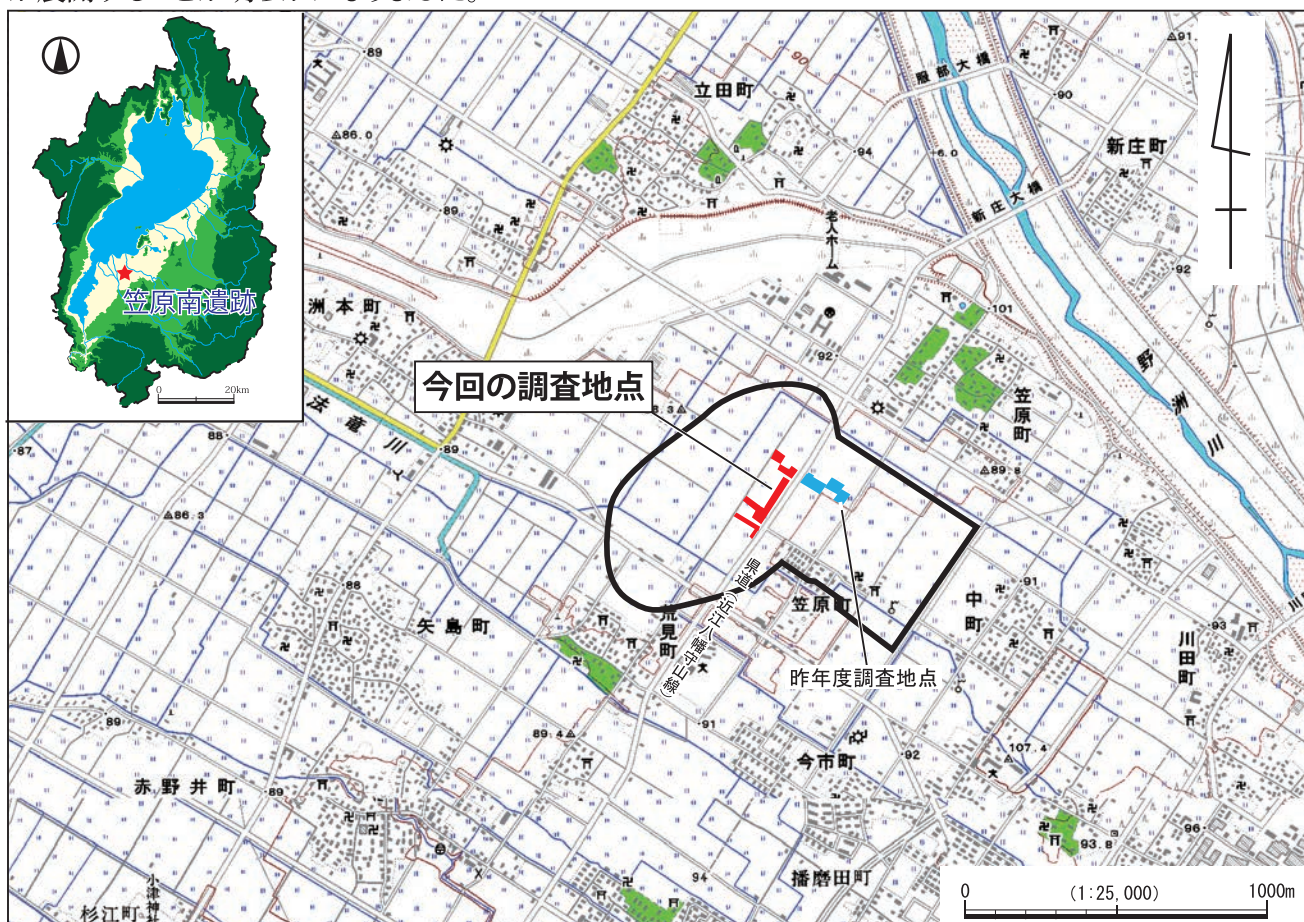


図1 笠原南遺跡(黒枠)と今回の調査地点(赤塗部分)

おもな遺構

遺跡の概要

今回調査した地点の西側には沼沢地しょうたくちが広がっていました。その東側は微高地びこうちになっており、遺構はこの場所に集中して見つかりました。みつかった遺構の時期は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてであり、さらにⅠ～Ⅲ期の3時期に分けられます（図2）。

このうち⑤-3・4・10区ではⅡ期を中心とした周溝墓がまともみつかったほか、周溝墓に近接して木棺墓・井戸・独立棟持柱付建物がみつかりました。周溝墓・独立棟持柱付建物・井戸という遺構の構成は、令和7年度にみつかった遺構群に類似しています。つまり前回同様、この地点は墓とそれにともなう祭祀の空間だったと考えられます。この時期の墓域と祭祀空間がセットで発見されることはきわめて珍しく、この時期の葬送のあり方を考えるうえで重要な成果といえるでしょう。

また、今回調査した地点の北西側では建物群が見つかり、この場所に居住域が展開していたと考えられます。

○独立棟持柱付建物

桁行3間（約4.2m）・梁行1間（約4.2m）の建物です。柱穴の掘方が大型（長軸0.7～1.2m・短軸0.6～1m）で、平面形態が長楕円形ちやうだえんけいであることや、棟持柱を備えていること、また周辺に建物が無いことから、この建物は墓の祭祀にかかわる特別な役割を持っていたと考えられます。この建物も、Ⅱ期：弥生時代末～古墳時代初頭（約1,750年前）のものとみられます。

○木棺墓1

丸太を削り抜いて造られたとみられる木棺です。本体の残存部は長さ1.0m・幅0.35m・厚さ0.25m・遺体を納める部分の残存部は長さ0.75m・幅0.15m・深さ0.05mと非常に小さいことから、子どもの棺と見られます。

この木棺には、本体と同じく丸太を削り抜いたとみられる蓋ふたがかぶせられていたほか、木棺墓の下には丸太材が3本敷かれていました。

○木棺墓2

厚さ1cmに満たない板材を組み合わせて造られていました。遺体を納める部分の残存部は長さ0.95m・幅0.2m・深さ0.05mで、木棺墓1と同様子どもの棺と見られます。



独立棟持柱付建物



木棺墓1

木棺墓2



木棺墓1



木棺墓2

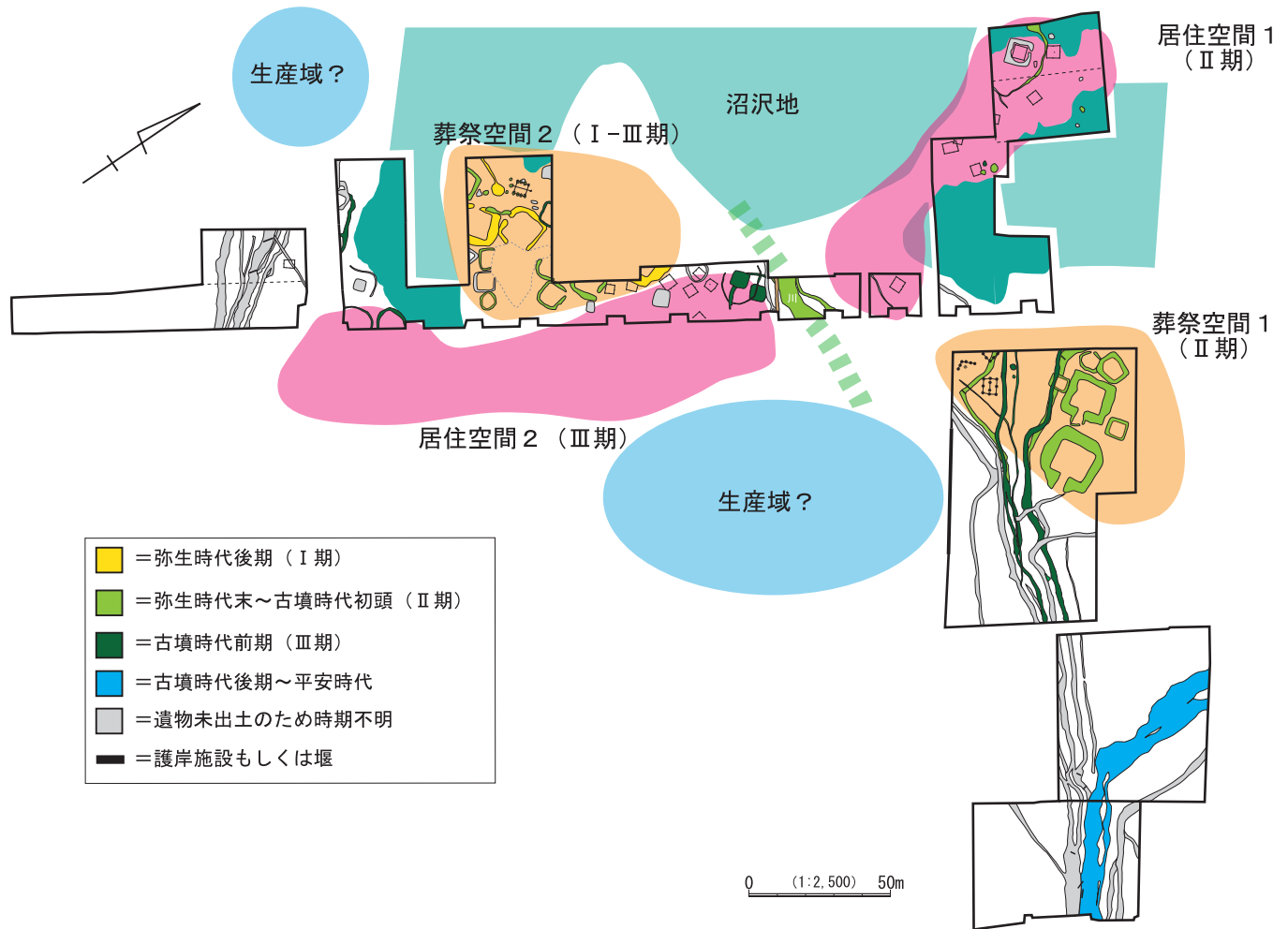


図3 笠原南遺跡の景観イメージ図

○周溝墓

今回の調査区では、計12基が見つかりました。周溝墓は墳丘内に主体部(遺体を葬る場所)を設け、墳丘の周囲に溝をめぐるせます。今回見つかった周溝墓は、墳丘および主体部が後世の削平により失われ、周溝だけが残っていました。なお、今回見つかったのは方形周溝墓と円形周溝墓です。

調査地の南側や北側では周溝墓が確認されていないことから、墓域がおおむね調査対象地の中央部に広がっていたと判断できます。また、周溝墓の時期は、すべてが判明したわけではありませんが、I期に墓5・9・10が築造され、なかでも墓9が最も早く、次いで墓10が築造されたことが分かりました。今回見つかった周溝墓群のうち、I期の周溝墓は大型であること、周溝が広く浅いことが特徴です。II期はこの地点で最も多く墓が作られた中心時期で、東側の令和7年度調査地点(図3の「葬祭空間1」)でも周溝墓が築造されました。その後、III期の墓11を最後に造墓^{ぞうぼ}が停止したと考えられます。

調査成果のまとめ

今回の発掘調査によって得られた成果は、以下のようにまとめることができます。

- ①新たな墓域が見つかり、墓域の開始時期が弥生時代後期にさかのぼる。
- ②複数の形式の墓(周溝墓—前方後方形・方形・円形、木棺墓)がある。
- ③棟持柱を持つ特殊な建物が墓域に隣接して建てられており、墓にまつわる祭祀空間を形成していた。
- ④居住空間は、時期によって異なる地点(現在の県道沿い東側と調査対象地の北西側)で展開される。

昨年度の調査によって、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての野洲川左岸下流域に広がる集落の一端が見えていましたが、今回の発掘調査でより広域に調査したことにより、この集落の具体的な景観が浮かび上がってきました(図3)。